

令和5年度第3回 宇治市乳幼児教育・保育推進協議会

日時：令和5年12月1日（金）

午後4時から

場所：宇治市職員会館

2階 大会議室

< 次第 >

- 1 開会
- 2 検討
 - 専門部会からの報告事項に対する検討
 - ア 保幼小連携専門部会
 - イ 発達・子育て支援専門部会

 - 保育要録・指導要録の統一化の検討

 - 乳幼児期の教育・保育の基本理念の検討
- 3 その他連絡事項
- 4 閉会

< 資料 >

ページ

専門部会からの報告事項に対する検討 関係資料	
ア 保幼小連携専門部会	
報告書	... 1
第3回 主な意見 資料1	... 2
第3回保幼小連携専門部会 資料一部抜粋・加工 資料2	... 3
イ 発達・子育て支援専門部会	
報告書	... 6
第3回 主な意見 資料3	... 8
保育要録・指導要録の統一化の検討 関係資料	
保育要録・指導要録の統一化の検討	... 9
保育所児童保育要録 資料4	... 10
幼稚園幼児指導要録 資料5	... 12
幼保連携型認定こども園園児指導要録 資料6	... 14
京都市子どもはぐくみ要録 資料7	... 16
乳幼児期の教育・保育の基本理念の検討 関係資料	
乳幼児期の教育・保育の基本理念について	... 18

部会検討まとめ（第2回推進協議会報告内容ポイント）

- （１）保幼小連携の取組推進
 - ・連携園が決まっている(グルーピング)と取組を進めやすい
 - ・できれば早期に各地域で連携会議等が開催できることが望ましい
- （２）連携事業の実施
 - ・各地域の実態に応じ、連携事業を進めることが望ましい
 - ・過度な負担とならない持続可能な連携手法や実施内容を検討
- （３）研修の実施について
 - ・各施設の先生同士が交流し、子どもの情報等共有ができる場が望ましい

次年度に向けた対応策の提案

- （１）グルーピング組織の名称について
 - ・覚えやすく、言いやすい名称が良いのではないか
 - ・保幼小の連携については、文部科学省が進めている「幼保小の架け橋プログラム」のイメージもある
 - ・「保幼小」と言うと各施設の違いが言葉に表れているイメージもある
 - ・幼児期と小学校への就学を結ぶ意味をシンプルに表す方が連続性を感じる
(仮称)架け橋ブロックという名称で部会員の意見は一致
- （２）保幼小連携交流事業の実施に向けて
 - ・以前の交流事業において、実施することが主となり、事前に就学前と小学校の先生同士で準備や打ち合わせが出来ていなかった
 - ・カリキュラムを作ることも必要だが、まずは実際に交流の実施に向けて、先生同士がお互いを知り、気軽に連絡を取り合える関係が大事
まずは先生同士の交流から始めることで円滑なスタートが切れる
コーディネーター等の全体を見て事業を進められる人の存在も必要
- （３）次年度の研修内容について
 - ・グループ協議などの参加者同士の交流がある研修は継続してほしい
 - ・今まで話をしたことがなかった先生との情報共有ができた
 - ・若手の先生にとっては、協議内容が難しいと感じた方もいた
理論からの実践を見据え、まずは研修を通して先生同士の交流を図り、(仮称)架け橋ブロックでの交流に繋げる

第3回保幼小連携専門部会（課題についての検討） 主な意見

1 グルーピング組織の名称について

覚えやすく、言いやすい名称が良いのではないか

保幼小の連携については、文部科学省が進めている「幼保小の架け橋プログラム」のイメージもある

「保幼小」と言うと各施設の違いが言葉に表れているイメージもある

幼児期と小学校への就学を結ぶ意味をシンプルに表す方が連続性を感じる

（仮称）架け橋ブロックという名称で部会員の意見は一致

2 保幼小交流事業の事業例及び交流推進ツールについて

Aグループ

小学校が運動会の練習をする時にその様子を見せてもらう

秋遊び（例：どんぐりや落ち葉拾いをして製作をする）

「おもちゃらんど」等の何かを一緒に作るような交流

国語の授業の一環として、作るときには小学校の先生の説明を聞く

就学前施設の子どもの人数が多い時は、小学校のクラスごとで分けて受け入れる体制をとる

体育館は学年によって使える日時が決まっているため、いつでも使用できるわけではない

まずは先生同士の交流から始めることで交流事業がスムーズに行く

Bグループ

必ずしも交流の対象を小学生としない交流の仕方

児童会のおまつりなど、イベントを通じて小学校の環境に触れる、見る、体験する（例：トイレの体験）

小学校の先生との交流により、少しでも顔を知っている先生がいるという経験
多くの就学前施設の子どもたちを受け入れる場合、小学校側の体制の確保が必要

半日入学と交流事業の違いを明確にする必要がある

先生同士が年間を通じて気軽に連絡がとれる関係づくりが大事

各ブロックを取りまとめる中心となる存在が必要

安全面にも十分な配慮をしつつ、各ブロックでできることから取組を進める

3 次年度の研修内容について

グループ協議などの参加者同士の交流がある研修は継続してほしい

今まで話をしたことがなかった先生との情報共有ができた

若手の先生にとっては、協議内容が難しいと感じた方もいた

< 第 3 回保幼小連携専門部会 資料一部抜粋・加工 >

ア．グルーピング組織の名称検討候補

区分	名称
既存	保幼小連絡会
案 1	架け橋ブロック
案 2	保幼小連携（接続）ブロック
案 3	小学校ブロック
案 4	幼小連携ブロック
案 5	その他

イ．今後のスケジュール

時期	区分	内容
12 月	推進協	保幼小連携グルーピング組織の名称決定
	市 就学前 施設	・「(仮称)架け橋ブロック」(案)の提示 ・保幼小連携交流事業アンケートの実施
	市 小学校	・「(仮称)架け橋ブロック」(修正案)を提示 ・保幼小連携交流事業アンケートの実施
1 月	市 全施設	「(仮称)架け橋ブロック」の決定・周知
2 月	準備室	保幼小合同研修講座 教育研究員 幼小接続部会の交流事例発表 グルーピング組織別のグループワーク等を予定

ウ．アンケートの主な質問項目について

< 就学前施設向け >

- 1．今回提示している小学校以外と連携を希望する小学校はありますか。
- 2．別紙の交流事業例も参考にすることで、次年度の交流事業として実施を希望する事業を 3 つ回答願います。

< 小学校向け >

- 1．別紙の交流事業例も参考にすることで、次年度の交流事業として実施が可能と想定される事業を 3 つ回答願います。

< 実施目的 >


- 1．各施設が実施を希望する事業内容を集約
- 2．施設間で取組方針に不満が生じないように情報を共有

(仮称)架け橋ブロック(案)

No.	小学校	公立幼稚園	公立保育所	私立幼稚園	民間認定こども園	民間保育所(園)	計
1	菟道		善法	こざくら	みんなのき三室戸	みんなのきHana	5
2	菟道第二	神明	宇治		南浦くすのき		4
3	小倉		小倉双葉園	宇治			3
4	北小倉			小倉	こひつじ		3
5	槇島				槇島ひいらぎ のぞみ		3
6	北槇島				いずみ		2
7	西小倉		西小倉	堀池 西小倉			4
8	南小倉				南浦		2
9	神明			みのり	ひいらぎ		3
10	伊勢田				伊勢田		2
11	西大久保		大久保				2
12	平盛				同胞	くりくま	3
13	大久保			ひろの		広野	3
14	大開						1
15	三室戸					あさひ	2
16	南部			かおり			2
17	岡屋	東宇治			みんなのき黄檗(本園)		3
18	木幡	木幡	木幡 北木幡		登り(本園) 第2登り		6
19	御蔵山			大谷大学附属大谷	登り(分園)		3
20	笠取						1
21	笠取第二						1
22	宇治				みんなのき黄檗(分園) 明星っ子	なかよし(本園・分園)	3
						合計	61

(3) 保幼小交流事業の事業例の検討

(就学前の子どもを園児で表記)

準備	小学生との交流	事業例
少  多	無し (大人同士)	・ 公開保育・授業参観への参加 (保護者参観や計画訪問と同日設定など既存事業の対象拡大)
		・ 合同研修会 (中学校区などでの既存事業の対象拡大)
		・ 意見交換会 (校・園長クラス、1年担任など)
	無し	・ 園庭や校庭での草木の観察、落ち葉・木の実収集
		・ 小学校への避難訓練
		・ 施設見学 (砂場、体育館、校舎など)
		・ 施設体験 (砂場、鉄棒、遊具、ランチルームなど)
		・ 授業見学 (体育、音楽、運動会予行練習など)
	あり 生活科 カリキュラム	・ 校長先生からの学校説明
		・ 小学生と園児が一緒に遊ぶ交流 (体育館で一緒に手つなぎ鬼など)
		・ 小学生が園児を案内する交流 (体育館、理科室、遊べるコーナーなど)
		・ 小学生が園児にお手本を見せる交流 (1年生以外も想定) (折り紙の折り方などを紹介する役)

部会検討まとめ（第2回推進協議会報告内容ポイント）

- （１）保護者支援について
 - ・保護者対応についての研修のより一層の充実が必要
 - ・職員とともに保護者が成長していくための多方面からの支援が必要
- （２）就学前施設と療育施設間の連携について
 - ・療育施設の職員が行う支援の方法等を就学前施設で充実させるなど職員のスキルアップのための方策が必要
- （３）支援体制の整備等について
 - ・専門職が訪問するなど支援に活用していく体制の整備が必要

次年度に向けた対応策の提案

- （１）支援体制の整備等について
 - ・保護者が自発的に発達サポート事業の利用申込みをするケースは少ない
 - ・発達サポート事業の対象範囲を絞らず、その時々の子育ての困り感を支援できるといい
 - ・障害児保育指導員による巡回訪問は幼稚園が利用できないため、公平性の観点からも施設類型を越えて利用できるような事業の見直しの必要性
全ての子どもがより豊かに集団生活を送れるよう、センターが主体となり、各施設を訪問し、園の先生方を支援できる手法を検討
- （２）「移行支援シート」のあり方について
 - ・園と保護者が一緒に作成するので、その過程で子どもの情報を共有できるとともに、保護者も子どもへの関わり方が変わる
 - ・小学校も引き継いでいくという意識を持てるので、移行支援シートは必要
 - ・様式の統一に伴い、ポイントを絞って作成することで情報が整理される
引き続き統一様式をベースに作成する中で課題が生じた場合に、その都度改善に向けた検討を実施
- （３）次年度の研修内容について
 - ・同じ講師の先生によるテーマをシリーズ化した研修の方が専門性が高まる
 - ・オンライン研修のある「キャリアアップ研修」が優先になる
 - ・どの施設類型にも参加することで保育への貢献が実感できるシステム
保幼小連携専門部会と連携して研修計画について検討を実施

発達・子育て支援専門部会(次年度に向けた対応策の提案)

(3) 次年度の研修内容について

保幼小連携専門部会

<主な意見>

グループ協議などの参加者同士の交流がある研修は継続してほしい
今まで話をしたことがなかった先生との情報共有ができた
若手の先生にとっては、協議内容が難しいと感じた方もいた

発達・子育て支援専門部会

<主な意見>

同じ講師の先生によるテーマをシリーズ化した研修の方が専門性が高まる
オンライン研修のある「キャリアアップ研修」が優先になる
どの施設類型にも参加することで保育への貢献が実感できるシステム

合同部会の実施

上記意見のほか、それぞれの施設類型で受講している研修を持ち寄り、次年度に必要なセンター準備室で実施する乳幼児教育・保育推進事業の研修について検討を行う

令和6年度の研修計画に反映

第3回発達・子育て支援専門部会（課題についての検討） 主な意見

1 支援体制の整備等について

保護者が自発的に発達サポート事業の利用申込みをするケースは少ない

3者(市、園、保護者)が発達サポート事業の相談結果を共有する方法の改善の必要性

入園時に全ての保護者に周知を図れば、市全体で子育てを支えるという姿勢になる

発達サポート事業の対象範囲を絞らず、その時々の子育ての困り感を支援できるといい

発達サポート事業の対象範囲を広げた場合に、障害児保育指導員による巡回訪問のいずれを利用するか難しい面があるため、2つの事業の一体化が望ましい

巡回訪問は幼稚園が利用できないため、公平性の観点からも施設類型を越えて利用できるような事業の見直しの必要性

2 「移行支援シート」のあり方について

園と保護者が一緒に作成するので、その過程で子どもの情報を共有できるとともに、保護者も子どもへの関わり方が変わる

小学校も引き継いでいくという意識を持てるので、移行支援シートは必要

様式の統一に伴い、ポイントを絞って作成することで子どもの情報が整理される

きめ細やかな対応が必要な子どもは、移行支援シートと園独自の資料などの併用が必要な場合がある

3 次年度の研修内容について

グループワークで先生同士や講師の先生と交流しながら学べた

過去のエピソードや具体的な事例を持ち寄った研修は、実践に活かしやすい

同じ講師の先生によるテーマをシリーズ化した研修の方が専門性が高まる

参加する先生のフォローの手配など、人員不足の中で参加してもらうのは難しい

オンライン研修のある「キャリアアップ研修」が優先になる

初任者研修等の対象別研修を実施するなど、若手の先生にも参加しやすい環境づくり

参加型研修のほか、オンライン研修や動画視聴での研修などの実施

研修日時は運動会など行事との兼ね合いも考慮してほしい

どの施設類型も研修に参加することで保育に貢献していることが実感できるシステム

2(2) 保育要録・指導要録の統一化の検討

< 各様式の主な相違点 >

1. 主たる記載欄の内容が異なる
2. その他記載欄の内容も異なる
3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の記載量が異なる

	保育所	幼稚園	認定こども園
主たる記載欄	保育の展開と子どもの育ち	指導上参考となる事項	
その他記載欄	特に配慮すべき事項	備考	特に配慮すべき事項
	最終年度に至るまでの育ちに関する事項	-	-
育ってほしい姿	様式の1/6程度 (別紙あり)	様式の1/2程度	

< 気づいたポイント >

1. 「特に配慮すべき事項」なのに記載欄は小さい
2. 幼稚園の様式に「備考」はあるが「特に配慮すべき事項」はない
3. 「育ってほしい姿」は大事な視点だが要録の大部分を占める必要性

< 京都市の取組 >

就学前施設と小学校との連携・情報共有推進に向けた検討チームを設置

京都市版標準様式「京都市子どもはぐくみ要録」を作成

「書きやすさ・送りやすさ・読みやすさ」を重視し、3種類を1種、A4化

< 要録管理と活用面の課題 >

1. 「長期保管」と「先生の利用のしやすさ」
 長期保管文書 校長室の鍵のかかるロッカーで保管
 見たいときに見れない ICT活用（管理フォルダ上のデータ保管）など
2. 時間的な課題
 1年生担任 入学式準備、学校に慣れていない子どもの対応など多忙を極める

課題の解消・軽減と「書きやすさ・送りやすさ・読みやすさ」の改善は両輪
 「伝えたいこと」「知りたいこと」のミスマッチが生じないような交流・研修

(様式の参考例)

別紙資料1
(様式の参考例)

保育所児童保育要録 (保育に関する記録)

本資料は、就学に際して保育所と小学校(義務教育学校の前期課程及び特別支援学校の小学部を含む。)が子どもに関する情報を共有し、子どもの育ちを支えるための資料である。

保育所児童保育要録 (入所に関する記録)

児 童	ふりがな 氏 名			性 別
		年 月 日生		
	現住所			
保護者	ふりがな 氏 名			
	現住所			
入 所	年 月 日	卒 所	年 月 日	
就学先				
保育所名 及び所在地				
施 設 長 氏 名				
担当保育士 氏 名				

保育の過程と子どもの育ちに関する事項 (最終年度の重点)		最終年度に至るまでの育ちに関する事項
氏名		
生年月日	年 月 日	
性別	(個人の重点)	
ねらい (発達を捉える視点)		
健康	<p>明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。</p> <p>自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。</p> <p>健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。</p>	<p>幼児期の終わりまでに育ってほしい姿</p> <p>※各項目の内容等については、別紙に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について」を参照すること。</p> <p>健康な心と体</p> <p>自立心</p> <p>協同性</p> <p>道徳性・規範意識の芽生え</p> <p>社会生活との関わり</p> <p>思考力の芽生え</p> <p>自然との関わり・生命尊重</p> <p>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</p> <p>言葉による伝え合い</p> <p>豊かな感性と表現</p>
人間関係	<p>保育所の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。</p> <p>身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。</p> <p>社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。</p>	
環境	<p>身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。</p> <p>身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</p>	
言葉	<p>身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p> <p>自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</p> <p>人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。</p>	
表現	<p>いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p>	
表 現	<p>生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</p>	
(特に配慮すべき事項)		

保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものであり、保育所における保育全体を通じて、養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されることを念頭に置き、次の各事項を記入すること。

○保育の過程と子どもの育ちに関する事項

*最終年度の重点：年度当初に、全体的な計画に基づき長期の見通しとして設定したものを記入すること。

*個人の重点：1年間を振り返って、子どもの指導について特に重視してきた点を記入すること。

*保育の展開と子どもの育ち：最終年度の1年間の保育における指導の過程と子どもの発達の姿(保育所保育指針第2章「保育の内容」に示された各領域のねらいを視点として、子どもの発達の実情から向上が著しいと思われるもの)を、保育所の生活を通して全体的、総合的に捉えて記入すること。その際、他の子どもとの比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。あわせて、就学後の指導に必要と考えられる配慮事項等について記入すること。別紙を参照し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して子どもに育まれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿をわかりやすく記入するように留意すること。

*特に配慮すべき事項：子どもの健康の状況等、就学後の指導において配慮が必要なこととして、特記すべき事項がある場合に記入すること。

○最終年度に至るまでの育ちに関する事項

子どもの入所時から最終年度に至るまでの育ちに関し、最終年度における保育の過程と子どもの育ちの姿を理解する上で、特に重要と考えられることを記入すること。

幼稚園幼児指導要録(最終学年の指導に関する記録)

別添資料1
(様式の参考例)

幼稚園幼児指導要録(学籍に関する記録)

区分	年度	平成	年度	平成	年度	平成	年度	平成	年度
学 級									
整理番号									

幼児	ふりがな					性別
	氏名	平成 年 月 日生				
	現住所					
保護者	ふりがな					
	氏名	平成 年 月 日生				
	現住所					
入 園	平成 年 月 日	入園前の				
転入園	平成 年 月 日	状 況				
転・退園	平成 年 月 日	進学先等				
修 了	平成 年 月 日					
幼稚園名及び所在地						
年度及び入園(転入園)	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度		
・進級時の幼児の年齢	歳 か月	歳 か月	歳 か月	歳 か月		
園 長 氏名 印						
学級担任者 氏名 印						

氏名	平成 年 月 日生	指導の重点等	平成 年度	(学年の重点)
	性別		(個人の重点)	
健康	ねらい (発達を捉える視点)	指導上の参考事項	備 考	
	健康			
人間関係	健康	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え
	人間関係	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重
言葉	健康	環境	言葉	表現
	人間関係	言葉	表現	現
表現	健康	環境	言葉	表現
	人間関係	言葉	表現	現
出欠状況	健康	環境	言葉	表現
	人間関係	言葉	表現	現

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	
健康な心と体	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領第2章に示すねらい及び内容に基づいて、各幼稚園で、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特徴に応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではないことに留意すること。
自立心	健康な心と体 幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
協同性	自立心 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	協同性 友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
社会生活との関わり	道徳性・規範意識の芽生え 友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、まわりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくらせたり、守ったりするようになる。
思考力の芽生え	社会生活との関わり 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えたり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を復立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
自然との関わり・生命尊重	思考力の芽生え 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感知取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
表現	自然との関わり・生命尊重 自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
現	表現 数量や図形、標識や文字などに親しみながら、様々な活動を通して、数量や図形、標識や文字などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
備 考	豊かな感性と表現 心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

学年の重点：年度当初に、教育課程に基づき長期の見通しとして設定したものを記入
個人の重点：1年間を振り返って、当該幼児の指導について特に重視してきた点を記入
指導上参考となる事項：
(1) 次の事項について記入すること。
①1年間の指導の過程と幼児の発達の姿について以下の事項を踏まえ記入すること。
・幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」に示された各領域のねらいを視点として、当該幼児の発達の実情から向上が著しいと思われるもの。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
・幼稚園生活を通して全体的、総合的に捉えた幼児の発達の姿。
②次の年度の指導に必要と考えられる配慮事項等について記入すること。
③最終年度の記入に当たっては、特に小学校等における児童の指導に生かされるよう、幼稚園教育要領第1章総則に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して幼児に育まれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿を分かりやすく記入するように留意すること。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことに留意し、項目別に幼児の育ちつつある姿を記入するのではなく、全体的、総合的に捉えて記入すること。
(2) 幼児の健康の状況等指導上特に留意する必要がある場合等について記入すること。
備考：教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動を行っている場合には、必要に応じて当該教育活動を通じた幼児の発達の姿を記入すること。

幼保連携型認定こども園園児指導要録(最終学年の指導に関する記録)

別添資料

(様式の参考例)

幼保連携型認定こども園園児指導要録(学籍等に関する記録)

区分	年度	平成	年度	平成	年度	平成	年度	平成	年度
学級									
整理番号									

園児	ふりがな					性別
	氏名	平成 年 月 日生				
保護者	ふりがな					
	氏名					
	現住所					
入園	平成 年 月 日	入園前				状況
転入園	平成 年 月 日	状況				
転・退園	平成 年 月 日	進学・				
		就学先等				
修了	平成 年 月 日					
園名及び所在地						
年度及び入園(転入園)	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度	
・進級時等の園児の年齢	歳 か月	歳 か月	歳 か月	歳 か月	歳 か月	
園長						
氏名						
担当者						
氏名						
年度及び入園(転入園)	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度	
・進級時等の園児の年齢	歳 か月	歳 か月	歳 か月	歳 か月	歳 か月	
園長						
氏名						
学級担任者						
氏名						

幼 児 氏 名 性 別 健 康 人 間 関 係 環 境 言 葉 表 現 現 状 出 欠 状 況	平成 年度	年度
	(学年の重点)	
	(個人の重点)	
	ねらい (発達を捉える視点)	
	健康 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見直しをもって行動する。	
	人間関係 幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したり一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	
	環境 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもち、 身近な環境に自分も関わり、発見を楽しんだり、考えたり、それを生活に取り入れようとする。 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感性を豊かにする。	
	言葉 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感性を豊かにし、保育教諭等や友達と心を通わせる。	
	表現 いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	
	(特に配慮すべき事項)	
年度	年度	
教育日数		
出席日数		

幼 児 期 の 終 り ま で に 育 っ て ほ し い 姿	
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領第2章に示すねらい及び内容に基づいて、各園で、幼児期にあそびや遊びや生活を積み重ねることにより、幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育みたい資質・能力が育まれている園児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、とりわけ園児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達特性に応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての園児に同じように見られるものではないことに留意すること。	
健康な心と体	幼保連携型認定こども園における生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見直しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行動するために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したり、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくらたり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えたり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼保連携型認定こども園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたり、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたり、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い	保育教諭等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

学年の重点：年度当初に、教育課程に基づき長期の見通しとして設定したものを記入
個人の重点：1年間を振り返って、当該園児の指導について特に重視してきた点を記入
指導上参考となる事項：
(1) 次の事項について記入
① 1年間の指導の過程と園児の発達の姿について以下の事項を踏まえ記入すること。
・幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された養護に関する事項を踏まえ、第2章第3の「ねらい及び内容」に示された各領域のねらいを視点として、当該園児の発達の実情から向上が著しいと思われるもの。
その際、他の園児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
・園生活を通して全体的、総合的に捉えた園児の発達の姿。
② 次の年度の指導に必要と考えられる配慮事項等について記入すること。
③ 最終年度の記入に当たっては、特に小学校等における児童の指導に生かされるよう、幼保連携型認定こども園教育・保育要領第1章総則に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して園児に育まれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿を分かりやすく記入するように留意すること。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことに留意し、項目別に園児の育ちつつある姿を記入するのではなく、全体的、総合的に捉えて記入すること。
(2) 「特に配慮すべき事項」には、園児の健康の状況等、指導上特記すべき事項がある場合に記入すること。

京都市子どもはぐくみ要録(学籍等に関する記録)

年度区分	年度	年度	年度	年度	年度	年度	年度
学級							
整理番号							

園児*	ふりがな							性別
	氏名							
	現住所							
保護者*	ふりがな							
	氏名							
	現住所							
入園*	年 月 日	入園前の状況						
転・入園	年 月 日							
転・退園	年 月 日	進学・就学先等*						
修了*	年 月 日							
園名及び所在地*								
年度及び入園(転入園)・進級時等の園児の年齢	年度	年度	年度	年度	年度	年度	年度	
	歳	か月	歳	か月	歳	か月	歳	
園長氏名								
担当者氏名								
年度及び入園(転入園)・進級時等の園児の年齢	年度	年度	年度	年度	年度	年度	年度	
	歳	か月	歳	か月	歳	か月	歳	
園長氏名								
学級担任者氏名								
入園(所)時の園児の姿								

* 保育園(所)における必須記載事項(保育所保育指針の適用に際しての留意事項について(平成30年3月30日付け子保発0330 第2号厚生労働省子ども家庭局保育課長通知))

京都市子どもはぐくみ要録(指導等に関する記録)

ふりがな			健康	明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
氏名*				自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
年 月 日 生			ねらい(人間関係)	健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。
性別				幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
年度			発達を促せる視点(環境)	身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
出欠状況	教育日数	出席日数		社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
指導の重点等(学年の重点)			表現	身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
指導の重点等(個人の重点)				身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
年度(年長児(5歳児))			言葉	身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
*				自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
			表現	人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
				日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、幼稚園教師・保育士・保育教諭等や友達と心を通わせる。
			表現	いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
				感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
			表現	生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

学年の重点:年度当初に、教育課程及び全体的な計画に基づき長期の見通しとして設定したものを記入
 個人の重点:1年間を振り返って、園児の指導について特に重視してきた点を記入
 指導上参考となる事項:保育は養護と教育を一体的に行うことをその特性とするものであり、保育全体を通じて、養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されることを念頭に置き、各事項を記入すること。
 ①1年間の指導の過程と園児の発達の姿について以下の事項を踏まえ記入すること。
 ・幼稚園においては、幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」に示された各領域のねらいを視点として、保育所及び幼保連携型認定こども園においては、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された養護に関する事項を踏まえ、同指針にあっては、第2章「保育の内容」に示された各領域のねらいを視点として、同要領にあっては、第2章第3の「ねらい及び内容」に示された各領域のねらいを視点として、当該園児の発達の実情から向上が著しいと思われるもの。その際、他の園児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
 ・園生活を通して全体的、総合的に捉えた園児の発達の姿。
 ②次の年度の指導に必要と考えられる配慮事項等について記入すること。
 ③最終年度の記入に当たっては、特に小学校等における児童の指導に生かされるよう、幼稚園教育要領、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して園児に育まれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿を分かりやすく記入するように留意すること。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことに留意し、項目別に園児の育ちつつある姿を記入するのではなく、全体的、総合的に捉えて記入すること。
 ④備考欄については、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動を行っている場合には、必要に応じて当該教育活動を通じた幼児の発達の姿を記入すること。また、園児の健康の状況等、「特に配慮すべき事項」がある場合に記入すること。保育所において、指導等の記録を1頁に収めたい場合には、「最終年度に至るまでの育ちに関する事項」を記載することも可能であること。

乳幼児期の教育・保育の基本理念について

協議事項

- ・これまでの議論してきた内容の振り返り
- ・基本理念として掲げるキーワードの検討（内容・個数など）
- ・基本理念とセンターで取り組む施策との関連の検討

<これまでの議論等>

子どもを育む大きな視点として、市民が共感し、共有できるものあり方検討委員会意見「5つの観点」を踏まえたもの

【参考】「5つの観点」

1．子どもの健やかな成長の観点

- ・子どもが現在（いま）を最もよく生きること。
- ・子どもが人として輝き、その輝きをつないでいくこと。

2．特別な配慮や支援が必要な子どもの観点

- ・特別な配慮や支援が必要な子どもの就学前施設での受け入れ環境の整備を進めること。
- ・誰一人取り残さず、子ども同士の出会いをしっかりと結んでいくこと。

3．子どもの育ちと学びの連続性の観点

- ・保幼こ小といった施設類型にかかわらず、人が交流することで連携を進めること。
- ・宇治市教育振興基本計画にあるとおり、「切れ目のない支援のため、幼児期から義務教育終了まで一貫した相談・支援体制を構築」し、就学前後の施設が密に連携して子どもの育ちと学びの連続性を保障していくこと。

4．地域や家庭、施設の連携の観点

- ・家庭と就学前施設、地域の関係団体などの連携（つながり）が子どもの育ちや保護者の安心感につながるように、きめ細やかに連携すること。
- ・各就学前施設が小学校及び療育施設等と行っている連携を市全体で共有するとともに、こうした連携をさらに充実させること。

5．乳幼児期の教育・保育の重要性の観点

- ・子どもたちが、能動的に問いを見つけるような乳幼児期の教育・保育が、子どもたちの発達や学習の基盤、土台となること。

<これまで注目してきたキーワード>

「いまを生きる」

子どもが現在（いま）をいきいきと生きるための乳幼児教育・保育の取組を推進します。

<参考>

- ・子どもが現在（いま）を最もよく生きること
【第3回推進協議会 資料P18（あり方検討委員会意見より抜粋）】
- ・「幼児期は子どもたち一人ひとりがどの子ども生き生きと活動してほしいですし、したいことに向かって行ってほしい」
【第1回発達・子育て支援専門部会 意見】
- ・「子どもの将来を少しずつ見極めつつ、今何をしていこうかということ保護者と一緒に考えていくことが難しい」「（保護者から）今何に困っているかが伝わらない」
【第2回発達・子育て支援専門部会 意見】

「ともに育つ」

子どもの成長は一人ひとりによって異なることから、保護者が子どもの個性や発達状況を受け入れることが大切です。そのため、保護者自身も成長するとともに、乳幼児教育・保育に携わる職員も質の高い教育・保育を提供するための研鑽に努めます。

<参考>

- ・（保護者支援に関連して）「保護者も子どもと一緒に育っていくし、保育者、教師も一緒に育っていく～（中略）～一緒に探していくという姿勢が必要」「ともに育っていく」
【第2回推進協議会 意見】
- ・「子どもが主語になるということと、子どもだけということではなく、何か「一緒に」「私たち」という観点も、その言葉に入ると良い」
【第2回推進協議会 意見】
- ・「みんなが育っていくような、優しさのあふれる言葉、優しさを感じられる言葉というイメージ」
【第2回推進協議会 意見】

「みんながつながる」

全ての就学前施設をはじめ、専門機関や医療機関など、子どもの成長に関わる機関と連携して、子どもの育ちを支援します。

< 参考 >

- ・ 全ての就学前施設が施設類型を越えて子どもたちの状況や課題を共有し、連携・協働して研究・研修を行うことで、教育・保育の質の向上及び人材育成を図る
【第1回推進協議会 資料】
- ・ 施設類型を越えたネットワークの構築
【第1回推進協議会 資料P1】
- ・ 保幼小連携
【第1回推進協議会 資料P1】
- ・ (仮称) 架け橋ブロック
【第3回推進協議会 資料P1】
- ・ 就学前施設と療育施設間の連携
【第2回推進協議会 資料P6】
- ・ 参加型研修による協働的な学びの場
【第1回推進協議会 資料24】
- ・ 家庭と就学前施設、地域の関係団体などの連携(つながり)が子どもの育ちや保護者の安心感につながるように、きめ細やかに連携すること
【第3回推進協議会 資料P18(あり方検討委員会意見より抜粋)】
- ・ 「その取組を進めることについての主語はみんなである」
【第2回推進協議会 意見】

< 乳幼児期の教育・保育の基本理念（案） >

（案1）

「いまを生きる」「ともに育つ」
「みんながつながる」

（案2）

「生きる」「育つ」「つながる」

（案3）

「いまをよりよく生きる」
「ともに学び ともに育つ」
「子どもをまんやかに みんながつながる」



基本理念を（仮称）乳幼児教育・保育支援
センターで取り組む具体的施策に関連付ける

< 今後のスケジュール >

次回（令和6年度第1回）の推進協議会での確認事項（予定）

- ・（3つの）ワードが基本理念にふさわしいものか
- ・（3つの）ワードがセンターで取り組む施策（案）と関連づけられているか

次々回（令和6年度第2回）の推進協議会での確認事項（予定）【最終】

- ・（3つの）ワードがセンターで取り組む施策と関連づけられているか